

2019年度厚生労働省老健事業調査（「本人の思い」「本人・家族の生活」「市民の認識」「支援者の意識」）の報告

認知症 とともに生きる 本人、家族、市民の **声** 2020

第2回（全12回・分担執筆）

2回目は、小川敬之先生の「一般市民の認識調査」についての報告です。

地道な取り組みの一滴で芽吹くもの

京都橘大学健康科学部作業療法学科 主任教授 小川敬之

認知症の人と家族の会（以下「家族の会」）調査・研究専門委員会の委員として今回の調査に関わりました。これまでアンケート調査は数多く行いましたが、毎回なかなか数が集まらないことが悩みのひとつでした。しかし、今回の調査では全国から12,410件（内web回答：556件）というとても多くの回答を頂き、驚きとともに改めて「家族の会」の組織力と繋がりやの強さを感じた次第です。この場を借りて、その労力と意識の高さに感謝し、お礼を申し上げます。

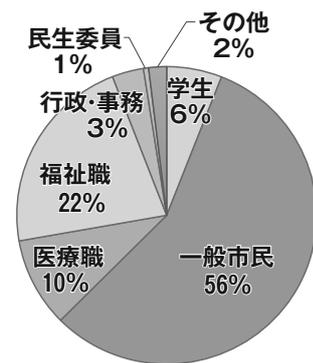
私が担当しましたのは専門職も含めた一般市民を対象とした認知症の人や介護家族、社会資源利用に関する意識調査です。ただ一般市民とは言いますが、厳密に言いますと、認知症関連の講演会やイベントに参加された方を主に対象としていますので、認知症ということに少なからず関心を持っている方々が対象になっていることは留め置いていただければと思います。

分析から見えてきた認知症に対するイメージ

アンケート回答者の年齢・性別の内訳は70歳代2,885件（23.2%）、60歳代2,426件（19.5%）、50歳代2,179件（17.6%）、40歳代1,685件（13.6%）の順で多く、男女比は男性3,201件

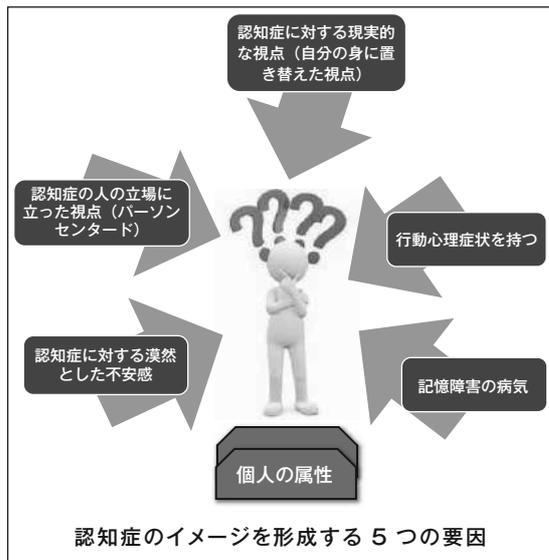
（25.8%）、女性9,012件（72.6%）でほぼ1：3の割合でした。回答していただいた方々の属性別（業種別）でみると下記のグラフのとおり、一般の方々の回答が6割近くありました。また、これまで認知症の人と接したことがあるか？との問いで「ある」「少しある」を合わせると84%にもものぼり、多くの方が認知症の人と接しており、その接点から感じ取っている「認知症」に対するイメージ（印象）がどのようなものか興味あるところでした。

職業別回答数



イメージを形作っている要因

認知症の人に対するイメージは「物忘れの病気である」「誰でもなりうる病気である」「悲しみや喜びを分かち合うことができる」など18項目の質問を4件法（1：思う、2：どちらかと



累積固有値：57.8 (バリマックス回転)

言えばそう思う、3：どちらかと言えばそう思わない、4：思わない)で回答してもらいました。分析に有効な10,485件の回答を対象に、回答の背後にどのようなイメージが存在しているのかを探る分析(探索的因子分析)を行いました。すると認知症の人のイメージを形作るのに5つの潜在的な要因があることが分かりました。その5つの潜在的な要因とは「認知症の人の立場に立った視点(パーソンセンタードの視点)」「行動・心理の障害を持つ」「記憶障害としての病気」「認知症に対する漠然とした不安感」「認知症に対する現実的な視点(自分の身に置き換えた視点)」でした。特に第一の要因に「認知症の人の立場に立った視点」があがったことの意味は大きいと思います。というのも第一の要因にあがったということは、その要因が認知症のイメージを形成するときが一番大きな影響を及ぼすということだからです。一昔前であればおそらくここには「行動・心理の障害を持つ」が来ていたかもしれません。少しずつですが認知症に対するイメージに変化が起きて来ている印象を受けました。

また、介護家族に対するイメージについても

報告書を希望される方は、1冊1,000円でおわけします。また、「家族の会」のホームページからダウンロードして読むことができます。

●申込先 「家族の会」本部事務局 TEL 050-5358-6580 FAX 075-205-5104 メール office@alzheim.or.jp

プロフィール

おがわ のりゆき
小川 敬之

京都橋大学健康科学部作業療法学科 主任教授



- ◆1986年 労働福祉事業団 九州リハビリテーション大学校作業療法学科卒 認知症専門作業療法士
- ◆宮崎大学医学系研究科博士後期課程卒 医学博士
- ◆現在教職の傍らNPO法人を立ち上げ、障害を持たれた方の社会参加にも取り組んでいる。京都府作業療法士会理事。2013年度日本認知症予防学会・浦上賞受賞
- ◆著書：認知症の作業療法 第2版(2015年)、認知症予防専門士テキストブック(共著)(2017年)

質問しました。その結果からは精神的負担があると思う78%、身体的負担があると思う67%、経済的負担があると思う54%であり、依然として様々な負担感があるイメージでしたが、介護者への手助けが必要であると思うが80%を超え、介護者の努力が必要と思うが50%であったことは、介護を抱え込むのではなく、皆で支え合いながら共生していこうとするマインドが確かに育っているように思います。「介護家族は認知症の介護を近所に知られたくない」と思うか?の質問では、思うは9%であり、思わない、どちらかと言えば思わないが50%近くあったことから「隠す」という対象から「共に」という意識の現れのように思いました。

2012年のオレンジプランから始まり、認知症施策推進大綱など国をあげて認知症の人、家族の支援を推進してきたことや、その時々で「家族の会」として本人・家族の生の声をしっかりと届けてきた結果が少しずつ実を結んでいる気がします。現在、経験や学び、職種などによってイメージに違いがあるのか、パーソンセンタードを形作っていく要因には何があるのかなどの分析を進めています。それらの結果についてもシリーズの後半で述べたいと思います。

本人
登場

私らしく
仲間とともに

No.175

助けてくれる人は
いっぱいいる



いのうえ ひろし
井上 浩さん

63歳・三重県支部

三重県若年性認知症施策総合事業、本人の会「レイの会」メンバーとして、5人目の登場です。

井上さんは、元小学校の校長先生。三重県若年性認知症支援コーディネーターの伊藤美知さんの聞き書きです。7ページは、「レイの会」の紹介です。
（編集委員 松本律子）

MCIの時期を経て、2016年に診断

MCIの時期が1年程あり、2016年に診断されました。その時、家族も普段通り接してくれましたし、私もガクンと来ることはなかったように思います。それに、周りの人はいろいろと考えることはあったかもしれませんが、「自分は自分だ」と考えていました。

「レイの会」で、ラン伴やフォーラムに参加

レイの会には、2019年3月から参加しました。はじめは「この人たちの間に入れるやろうか」と思いプレッシャーがありました。メンバーが良い人だったので、あっという間に打ち解けました。出遅れ感があったのですが、レイの会は入りやすかったので、助かりました。

レイの会の活動では、昨年のラン伴で、私が校長をしていた小学校に行きました。私は、子どもが大好きで、どの子を見ても「かわいい」と思います。子ども達がいっぱい寄ってきてくれて、とても楽しかったです。また、今年2月16日に行われた「第11回全国若年認知症フォーラム」で、私の話をたくさんの人に聞いてもらい、とても気持ち良かったです。

フォーラムで発表する井上さん



芋掘りをする井上さん（右）

一目惚れの妻は安心の源

妻との出会いは、私のひとめぼれでした。妻は、いつも「あなたの好きなようにすればいい」と言ってくれますし、ここというときに一言二言言ってくれます。フォーラムの会場で、会場の奥にいた妻を見た時には、「あそこにいる。一人じゃない」と思いとてもうれしかったです。見守ってくれる人がいるという安心感があります。しっかりしている妻なので、困ったら頼むようにしています。家族仲もよいので、家族はとても大切に思っています。

小中学生向けの講演活動をしていきたい

私はしゃべることが好きなので、これから小中学生向けの講演活動をしていきたいと思っています。「たくさんの方を持ってほしい。友人がたくさんいることは、助けてくれる人がいっぱいいるということ」を伝えていきたいと思っています。

今の楽しみは、レイの会のメンバーとともに出かけたり、はしゃいだりすることです。

～ Lay your hands on mine ～ 「レイの会」

「レイの会」の始まりと活動

三重県若年性認知症支援コーディネーター **伊藤 美知**

2本の電話が、きっかけで…

「レイの会」発足のきっかけは、2016年度三重県若年性認知症施策総合事業の中の電話相談にかかってきた2本の電話です。翌年度に若年性認知症カフェを計画していましたので、その二人に声をかけ、カフェの実行委員をお願いしたところ、二人は意気投合し、「レイの会」結成につながりました。

その二人が、現在「レイの会」会長 **東 準二** さん（ぼ～れぼ～れ475号掲載）と副会長の **磯部 理** さん（ぼ～れぼ～れ473号掲載）です。

磯部 理さん提案の「Lay your hands on mine」が、会の名称に

2017年10月、若年性認知症カフェの実行委員会で、磯部 理さんが、「若年性認知症本人自ら手を挙げなければ、困り切ってしまうので手を挙げてほしい」という一言とこの言葉をだされました。

「Lay your hands on mine」

この言葉は、「レイの会」のメンバーの「私たちは手を挙げています。私たちの手にあなたの手を載せてください。一緒に歩みましょう」という意味を含めて「レイの会」と名前を付け、二人で

スタートしました。

鈴鹿から始まった「レイの会」は、県内にひろがって、メンバーも11名になりました。



1日のスケジュール



「レイの会」初めての会議

「レイの会」の活動は、多岐にわたり、収益事業も

「レイの会」の活動は、4月に年度計画を立てます。畑作業、体力作り、外出先など決めます。講演活動も行っています。キャラバンメイトや市町村での認知症啓発のためのイベントにも講演依頼が来ます。今年の第11回全国若年認知症フォーラム（2月16日・四日市市文化会館）では、作品販売、寸劇や講演、若年性認知症カフェ、本人ミーティングと1日中、「レイの会」のメンバーが大活躍をしました。ラン伴にも参加します。

「レイの会」は、月水金とデイサービスの利用中にも活動しています。現在7名が活動していますが、そこでは、デイサービスの施設管理（草取り・掃除等）を担当し毎月管理費をもらったり、畑の作物販売や川柳を作り葉にして販売等、収益事業をしています。講演活動と日々の収入は、4月の定例会でみんなに分配しています。

「レイの会」の始めの一步は、ご本人の想いでした。たくさんのお出会いと、仲間が生まれています。メンバーは、みんな認知症であることを公表して、自然に生活しています。ご本人の「若年性認知症者として生きる」熱い覚悟が、これからの継続の源です。



本人交流の場

（詳細は各支部まで）

- 宮城●6月4日・18日休10:30～15:00 / 翼のつどい→泉区南光台市民センター
- 埼玉●6月20日出11:00～14:30 / 若年のつどい・越谷→越谷市中央市民会館
- 愛知●6月13日出10:30～16:00 / 元気

かい→東海市しあわせ村

滋賀●6月10日休10:00～14:00 / ピア・カウンセリング→県立総合病院職員会館2階会議室

広島●6月6日出11:00～15:30 / 陽溜まりの会東部→福山すこやかセンター
●6月20日出11:00～15:30 / 陽溜まりの会北部→三次市十日町コミュニティセンター

徳島●6月20日出13:30～15:30 / 緑の会→県立総合福祉センター

福岡●6月6日出10:00～12:30 / あまやどりの会→福岡市市民福祉プラザ

新型コロナウイルス感染の影響により、変更ないし、中止となる可能性があります。

会員さんからの お便り

このコーナーに寄せられたお便りの他、入会申込書、「会員の声」はがき、支部会報から選び掲載しています。

お便りお待ちしております！

〒602-8222 京都市上京区晴明町811-3
岡部ビル2F
〈「家族の会」編集委員会宛〉

FAX.075-205-5104

Eメール office@alzheim.or.jp

義父母・実父母4人 今後が大変

●京都府 Aさん 50歳代 女性

同居の義父（86歳）は診断されていませんが、記憶障害があり、排泄の失敗が多いです。義母（83歳）は、最近何回も同じ話を繰り返したり、聞いたりする事が増えました。

実父（87歳）は、前頭側頭葉型認知症です。何でもでき、電車で他府県へも行くことができますが、こだわりが強く、常識外れな事をしてしまいます。実母（83歳）は、ここ半年間で物忘れが多くなっています。

4人いるので、今後が大変ですが、兄弟姉妹で協力できています。

努力はしたが…

●埼玉県 Cさん 70歳代 男性

70歳代の妻が認知症を患い2年半位たった。いろいろ努力しても、何の効果もなく、ますます重くなっている様子を身近に感じている。救いを求めたいと思い、「家族の会」への入会を決心しました。

睡眠不足で参っています

●愛知県 Dさん 70歳代 男性

70歳代の妻は2018年MRI検査の結果、海馬が縮小してきており、アルツハイマー型認知症が始まっていると言われた。この頃は、物忘れがひどくなったくらいで、顕著な兆候は見られなかった。

今年2月くらいから「傾眠」が現れ、覚醒しても無気力で意欲がなく、なかなか次の行動に移れない。曜日を何度も聞き、物忘れもひどくなり、自分で書いたメモを頻繁に見るようになった。出かける時には何度もカバンの中身などを確認している。傾眠が原因で、食事、入浴、夜の洗濯などが押せ押せになってきて、寝るのが深夜2時から3時くらい、時には朝方になることがある。急な変化に戸惑うとともに、見守りや介助などで睡眠不足で参っている。

夫からの還暦のお祝い

●宮城県 Bさん 女性

夫は67歳です。64歳の時に若年性認知症の診断を受けました。すぐ「家族の会」に入り、月に一度のつどいには夫と参加しております。今年の2月15日のつどいはたまたま私の還暦の誕生日で、夫が会員の皆様に「今日は家内の誕生日です。」と紹介してくれ、「Happyバースデー」を歌ってくれました。歌の途中から私は涙があふれてしまい、他の会員の皆様も感動してくださいました。

夫がまだ発症前「お前の還暦は俺が祝ってやる。」と言ってくれたことがありました。あの時の夫の言葉はこのことだったのかなと思っています。「家族の会」の方の温かい拍手に包まれて本当に幸せなひと時でした。



ぼーれぼーれ3月号
「施設の限界を感じて」を読んで

介護は科学的な評価から始まる

●鳥取県 Eさん 50歳代 男性

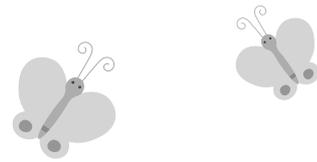
「人手が足りない、安全第一、娘さんも割り切って…」等、まだ立つことができたお父様が施設の都合でその可能性を奪われた無念は本当にお辛かったと思います。問題点は施設の現状にあります。施設でできないことは、自治体の問題として地域ケア会議で多職種による検討をしてもらうよう要望されればよいと思います。同じような問題を抱えている人や「家族の会」などと繋がりを持って対処していくことが必要と思います。

介護は多すぎても少なすぎてもご本人の能力を奪います。例えば、杖があれば外出して買い物ができるが、杖がなければ外出できない。介護は、その人に合った支え、杖を作ること。地域包括ケアシステムの構築は、まず、ご本人、地域のできる事、できない事を専門職とデータに基づいて評価する。足りない部分を専門職、行政、市民が補って、介護が必要な状態になっても、障害をもっても、認知症になっても安心して、自分らしく、住み慣れた地域で暮らしていけるシステムをつくることと思います。IT、AIの進歩とうまく連携して、人生100年時代を安心して暮らせる「ささえ」を作っていくことが今求められていると思います。

施設に家族の気持ちを知ってほしい

●Fさん 40歳代

お父様の残存能力を活かしたいと思う気持ちに、人手不足で応じられない施設の制約。私は13年の在宅と施設での父の介護と、1年半の介護職の経験があり、現場の方と家族の思いの距離にいたたまれない思いは同感です。転倒を恐れクレームがきたとのことで、利用者様を腫れ物、家族さんをクレーマーとする現場で、家族の気持ちを知って欲しいと苦しい思いをしていました。国がお金を福祉に使って欲しいとのことも、共感します。



ぼーれぼーれ3月号
「妹に辛くあたる父」を読んで

妹さんの苦労を分かってあげて…

●青森県 Gさん 女性

私の兄はアメリカ在住で、介護協力を望むことは無理でした。主治医から一度「アメリカの人も呼んで下さい」と言われ、来てもらいました。主治医に会う前にケアマネから説明してもらいました。兄に対し、分かってもらえていない事が悔しくて、「離職して面倒をみてください。」「アメリカに連れて行って嫁とふたりで面倒をみてください。」と言っていました。

兄は私が悪いから、母がアルツハイマー型認知症になったと思っているからです。母は私にとっても敵意を感じ、「物がなくなる、勝手に部屋に入って触る。」いろんなことを本当のように周りの人たちに話しをしていました。辛いというより、死にたいと思いました。そばに住んでいる、または一緒に住んでいる人じゃないと分からないことがたくさんあります。軽度から中度の時は特に症状が出るので、妹さんはとても辛い経験をしているかもしれませんよ。

どうしても、女性と男性の考え方の違いもあると思いますけど、親が認知症になると兄妹の仲が悪くなるケースをたくさん見てきました。私は今も兄と絶縁状態ですので、私たち兄妹みたくなくて欲しくありません。あなたから寄り添ってあげる努力をして欲しいです。早く修復できることを陰ながら願っています。

※お名前はイニシャルではありません。
年齢は「50歳代」等で表記しています。